

(第3種郵便物認可)

# サイ・テフ 知と技の発信 こらむ

【555】

## 埼玉大学・理工学研究の現場

大学教員として勤めていることもあり、昔から勉強ができてと思われがちですが、実はそうでもないとというのが本当のところ。昔の記憶をたどってみると、特別な勉強をすることもなく、中学生まではある程度学校の成績は良かった覚えがあります。中学校の授業を受けているだけで、ある程度記憶は追いついたし、数学の問題の解き方なども、勘で解けていました。ただし、そろそろ限界のシグナルが出ていました。高校入学し

て初めての定期テスト、現代文が100点満点中27点で、赤点を取った記憶があります。た、その頃は若かったのですね、その事実を素直に認めることなく、勘を頼りにして高校時代を駆け抜けてしまったようです。しかし大学に入学した後、本当の限界が来たか判りません。大学の講義が全く判りません。でも不思議なことに、単位は取れたのです。その時に、自分自身は大学生になって、より頭が働くようになったと勘違いし

## 「判らない」を越えて 長谷川靖洋 准教授



ていたのですが、冷静になるとやはり判っていなかったようです。私自身の大きな問題は「『判らない』と『判らない』との境界が判りなかつた」に尽きるのだろつと感じました。残念ながら自分自身の生まれ持った潜在能力だけでは中学校の授業に付いていくのが限界だったと今になっては判るのですが、その当時は小生意気な青年なので、自分自身の限界を認めることは難しかったようです。それがゆえに、自分自身の限界を超える、より複雑で難解な問題に対して、どのように真正面から対応する方法

が判らなかつたのだと思います。それはどうしても面倒で時間のかかるものです。中学の問題のように、ほんの数秒考えるだけで答えにたどり着ける問題ではな、じっくりと思考を巡らせて、さまざまな可能性を考えつつ、一つ一つ積み上げていく思考には至っていませんでした。また自分の頭の中で全てを考えることに限界があることに気付いていませんでした。では、どうするか。自分と向き合い、目の前にある問題は簡単でないことを認め、どこまでが判って、どこから判らないかを正しく見極める、謙虚で素直な気持ちが必要でした。私の場合、判っていることを全てメモのように紙に書き出し、それでもいきなりはまとまらないので、さらに段階目のまめめとして清書しています。基本、1年後の自分が見ても判るようなまとめ方で、非常に時間がかかりますが、それをファイリングしていくことで、自分の限界が少しずつ広がっていくことが感じられました。

すぐに判らないことに対して、どうやって対応していくかが求められる時代になりました。人によって方法は違つたため、自分にあつた方法の模索が必要なようです。

はせがわ・やすひろ 1971年生まれ。99年3月総合研究大学院大学修了。博士(工学)。埼玉大学大学院助手を経て、2007年4月より同校准教授。専門はエネルギー変換、熱電気物性、ナノ加工。